

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：14301
 研究種目：基盤研究 C
 研究期間：2010年度～2012年度
 課題番号：22520046
 研究課題名（和文）
 黄庭堅絵画理論研究
 研究課題名（英文）
 Reseach about Huang Tingjian's theory of picture
 研究代表者
 宇佐美文理（USAMI BUNRI）
 京都大学・文学研究科・教授
 研究者番号：70232808

研究成果の概要（和文）：

黄庭堅の絵画理論における気と形の問題について、本研究では「胸中の丘壑」という考え方を中心にして考察した。胸中の丘壑とは、画家の心の中に丘壑、あるいは山水があつて、それがもたになって、山水画が描かれるという、画家の心の中の山水のことである。これは、これもよく知られる「胸中の竹」という発想とともに、宋代に大きくクローズアップされて、中国山水画理論の中心的概念としてよく知られるが、それがそのもそもいかなるものであったのかを再検討し、この概念の形成における黄庭堅の位置、意味を明らかにしたことが本研究の大きな成果である。なお、研究に平行して、山谷画跋についての訳注を作成した。

研究成果の概要（英文）：

About Huang Tingjian(黄庭堅)'s theory of picture, new knowledge about the problem of mountains in mind(胸中丘壑) and a relation with Buddhism was acquired. Simultaneously, the translation and annotation about the Shan gu hua ba(山谷画跋) were created.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
22年度	500000	150000	650000
23年度	300000	90000	390000
24年度	500000	150000	650000
年度			
年度			
総計	1300000	390000	1690000

研究分野：中国哲学

科研費の分科・細目：中国哲学

キーワード：黄庭堅 中国絵画理論

1. 研究開始当初の背景

黄庭堅については、これまでその文学における研究は数多くなされているものの、彼の絵画理論史にかかわる文章については、世界的に見てもほとんど研究がなされず、研究の蓄積がない。例えば、現在の中国の絵画理論史の著述の中で最も詳細なものと考えられる于世襄氏の『中国画論研究』（全六冊、広西師範大学出版社、2002年）の中でも、黄庭堅は、蘇東坡との関連でほんの少し触れられるのみにとどまっている。また、近年作られた全十八冊からなる『中国書画論叢書』（湖南美術出版社）において、黄庭堅の題跋等が当然収録されるべき『宋人画評』巻（同社、1999年）には、東坡評画や徳隅齋画品、広川画跋はあるが、黄庭堅は取り上げられていない。却って我が国の中村茂夫氏の『中国画論の展開—晋唐宋元篇—』（中山文華堂、1965年）は黄庭堅に多くのページをさくが、黄庭堅の意見をすべて「禅」に収斂させ、すべて禅でもって理解しようとする論旨には、にわかに従いがたい。もちろん、黄庭堅への禅の影響を無視することは出来ないが、それは蘇東坡の場合も同様で、彼らの心性を禅でくくってしまっただけでよしとすることには、いささかの不安を禁じ得ない。上記抄物の存在が端的に物語るように、我が国五山の禅僧達が蘇東坡や黄庭堅を好み、注釈書を多く残したのは、彼らの詩文に仏教的なものが存在するからこそではあるものの、いうまでもなく抄物は『毛詩抄』などがあるように、仏教関係のものだけに作られたわけではなく、あくまでも中国思想全体（芸術理論も含めて）の中での位置を見定める必要がある。あるいは黄庭堅の画論をも「禅による」としてしまいたくなるのは日本人的な心性のなせるわざなのかもしれないが、そのような風潮を払拭する必要があるというのが、この研究が必要となる重要な背景である。

2. 研究の目的

本研究は、中国北宋期の黄庭堅の思想、とりわけ彼の絵画思想の解明を目指すものである。これは、代表者が構想している、中国思想史における芸術理論

の位置づけならびに、芸術理論がいかに中国思想史に影響を及ぼしたか（形というものを問題とする理論が、その性格故に思弁的な思想にどのような影響を及ぼしたか）という二つの柱を持つ、中国芸術理論史の重要な一部分をなす。本研究は、北宋絵画理論史における黄庭堅の位置を明確に見定めると同時に、絵画理論関係文献の詳細な訳注を作ることを一つの目的とする。

3. 研究の方法

代表者の個人研究と、中国哲学、中国美術史研究者からなる会読組織による、山谷画跋の研究会による研究を二本の柱とした。

4. 研究成果

本研究は、黄庭堅の絵画理論を、二つの面から解明した。ひとつは、研究代表者が従来から問題にしてきた、絵画理論について、「気と形」を主題的に考察し、中国思想史上に絵画理論を位置づけるという問題意識からの考察である。もう一点は、研究の背景にも記したように、従来の黄庭堅研究がもっている、「黄庭堅は仏教」という、判で押したような認識を払拭することにある。

前者の気と形の問題については、本研究では「胸中の丘壑」という考え方を中心にして考察した。胸中の丘壑とは、画家の心の中に丘壑、あるいは山水があつて、それがもとになって、山水画が描かれるという、画家の心の中の山水のことである。これは、これもよく知られる「胸中の竹」という発想とともに、宋代に大きくクローズアップされて、中国山水画理論の中心的概念としてよく知られるが、それがそのもそもいかなるものであったのかを再検討し、この概念の形成における黄庭堅の位置、意味を明らかにしたことが本研究の大きな成果である。

具体的には、以下のような知見を得た。

現在、胸中の丘壑、あるいは胸中の山水というのは、心に（理想的な）山水を思い浮かべて、それを画面に表現する、と解釈されることが多い。しかし、もともとこの言葉は、胸中に山水

のイメージをもつことを意味していない。「儒墨を折衝して陣は堂堂、書は顔楊に入りて鴻鴈して行く、胸中元自より丘壑有り、故に老木の風霜に蟠まるを作る」(『山谷詩集注』巻九「題子瞻枯木」という、この黄庭堅の「胸中に丘壑有り」ということばが、後世大きな影響力を持つことになるわけだが、しかし、これは山水画の話ではない。つまり、黄庭堅のこの詩は、胸中に山水のイメージを持って、それを画面に描き出すという話ではありえない。実はここで言う丘壑とは、『世説新語』の「一丘一壑は、自ら謂へらく之に過ぎたり」(『世説新語』品藻十七条。参観巧芸十二条)に基づいている。さらにこれは、『漢書』の「独り師は造化を友として世俗の役する所と為らざる者なり。一壑に漁釣しては則ち万物も其の志を好まず、一丘に栖遅しては則ち天下も其の楽しみを易へず」(『漢書』叙伝)に基づき、世俗から離れて山水に身を置いた生活というイメージであることがわかる。黄庭堅は、この胸中の丘壑についてはしばしば言及し、山谷が強調したとよく言われる韻についても、「胸中の韻」として発言している。しかし、黄庭堅が胸中の丘壑を山水画に現すのだと述べている発言には出会えない。それが重要である。この丘壑を黄庭堅は例えば、「或ひと言ふ、子瞻は当に伯時を目して前身は画師と為すべからずと。流俗の人は領せず。便ち是れ語病なり。伯時は一丘一壑、古人を減せず。誰か当に作此の痴計を作すべけん。子瞻の此の語は是れ真に相い知る。(『予章黄先生文集』巻二七「題李伯時憩寂図」)のように使う。これも、確かに李公麟も山水画を描く画家ではあるが、ここでも山水画に限定した表現ではない。さらに、黄庭堅の表現で注目すべきは、胸中の「韻」についてであるが、「陳元達は千載の人なり。惜むらくは、勅業に画を作る者、胸中に千載の韻無きのみ。」(黄庭堅『予章黄先生文集』巻二十七「題模鎖諫図」)と見えるように、鎖諫図という画題で始めて絵をかいた画家が、胸中に「韻」がなかったために、この黄庭堅の見た模本の鎖諫図は絵画にも韻がないものとなってしまった、というわけである。いずれにしても、黄庭堅が胸中に求めたのは、特に山水(画)に限定されない、文人としてのあるべき精神的「境地」であった。しかし彼以

降、山水画にこの胸中の丘壑が重要な意味を持って登場してくる。そして、そのきっかけとなったのは、これもまた実は黄庭堅なのだが、そこで重要なのは以下の「摩詰画」と題された詩であり、「丹青王右轄、詩句九州に妙たり、物外常に独往し、人間に求むる所無し、手を袖にする南山の雨、輞川桑柘の秋、胸中に佳処有り、涇渭同流と看る」(『山谷外集注』巻十三「摩詰画」)この詩が胸中の丘壑と山水画の結びつきに大きな影響を与えている。これは、王維の絵についての題画詩であり、有名な王維作とされる「輞川図」との関わりも示されるので、山水画と関連した黄庭堅の「胸中」に関する発言ということになる。ただし、これもやはり、山水を胸中にイメージすることを語っているわけではない。ここで黄庭堅が「有佳処」とするのは、実は、司馬承禎の「盧藏用始め終南山中に隠る。中宗朝、累りに要職に居るに、道士司馬承禎なる者有り、睿宗迎へて京へ至らしむ。将に還らんとするに、藏用、終南山を指して之に謂ひて曰く、此の中に大いに佳処有り。何ぞ必ずしも遠きに在らん。承禎徐ろに答へて曰く、僕の観る所を以てすれば、乃ち仕宦捷徑なるのみ。藏用慙色有り。(『大唐新語』巻十)」という話の関係している。さればこそ、胸中の丘壑が、山水画(王維の)と関係づけて話されるようになるのである。なお、この「摩詰画」詩の「胸中」云々について、たとえば黄宝華『黄庭堅選集』(上海古籍出版社1991年)は、「謂得道或覚悟真如仏性」としているが、ここに述べたように、特に仏教を持ち込む必要はないことは明らかであり、すべてを仏教に関連させて説こうとすることには大きな疑問があることはこの部分の考察においても明らかになったと思われる。

なお、この「胸中に佳処あり」は、蘇東坡も何度か使っている表現であり、胸中に「佳処」があるので、世間にあっても精神的には清澄な気持ちを、あるいは健康な精神を保つことが出来ることをしばしば詠っている。なお、ではこの胸中に形象的イメージを持って「山水を」描くと言ったのは誰なのかが問題となるが、まず挙げるべきは郭熙の『林泉高致』であり、郭熙は明確に「歴歴として山水が胸中に羅列」することを要求し、さらにこれをより明確に表明したのは、『宣和画譜』

の山水序論である。要するに黄庭堅が理想的精神状態として「丘壑」を持ち出し、それが山水を示すものだったので、これは都合がいいと、山水画はそれに飛びついたのである。

さらに、本研究は文学的連想の問題にも踏み込んで考察を深めた。黄庭堅の「理想的胸中」のイメージを示すものとして、黄庭堅が陳太丘に見せるイメージをすこし追ってみると、黄庭堅は「太丘 胸量闊し、一葦 之を杭する莫し」(『山谷詩集注』卷十八「陳榮緒惠示之字韻詩推獎過実非所敢当輒次高韻三首其二」)あるいは「太丘 心は灑落、古松 韻は清深」(『山谷詩集注』卷十八「晚発咸寧行松徑至蘆子」)としている。陳太丘のイメージは、『文選』あるいは『世説新語』のイメージにもとづいており、また、既にこの「胸中」という言葉自体が、胸中に山水あるいは三次元的空間がある、とイメージするならば、そこでは司馬相如の「子虚賦」おそらくすぐに思い浮かぶに違いない。胸中に広大な空間を包み込んでいるというイメージは、古典を読むものに既に共有されたものとして出来上がっているとも言えるのである。つまり、黄庭堅が語る胸中の丘壑は、このような文学的なイメージの連鎖によっても存在していることを考慮に入れておく必要がある。このようなイメージ群の中にある人々、すなわち詩人ということになるが、彼らにとっては、山水の形象は、形象のまま、そのイメージ群の中に取り込まれることになる、それも言えるであろう。そしてそれは、すぐれて「鑑賞者」の発想であることも重要である。

以上、代表者の問題意識の中でまとめてみるならば、以下のようなことになる。道は見えないもの、見えているものは、道をのせた器である、とすることは簡単だが、彼らにとっては重要なものは道であって、形ではない。その基本的な構造の中で、どうやって形にとらわれずに、形をつくっていくのか、それが絵画の仕事だった。宋代には、理というものが全面に出てくることによって、気は無形なる存在から、一步外に追いやられ、形而下の世界のものとなされる。従って、気象は既に形而下のものとならんとしている時代であった。もちろん、それ以前から、気象は気ではないので、無形ではない。黄庭堅の胸中の丘壑は、気象の発想に

もとづいて、無形なるものの表現としての可能性を持っていた。したがって、『宣和画譜』のように李成の「吐露」として山水を考えることもできた。そして、米芾的な胸中の山水は、気象という発想を既に使わないものともいえるが、ある意味では、イメージに過ぎない、無形なる存在を、有形なる画面として表現するものとして、形の束縛を逃れることが出来た。一方郭熙は、気象を表現して画面を作り出すというかたちで、形ならぬ表現を模索する。つまり、いずれも形からは離れようとする点では軌を一にするのであった。

以上は、論文「形」と気象」(『哲学研究』593)に、北宋の他の理論家の記述とあわせて発表した。なお、本研究のもう一つの問題意識に関連して、上記文中の仏教に関わる部分については、当該論文には記述をしていない。

この問題についても論考を準備する予定であったが、画跋は考察を終えたものの、詩集のさらなる精密な考察が必要と考え、別稿に期することとした。

もうひとつの研究の柱、山谷画跋の訳注については、中国美術史の研究者の協力も得て作成することができた。会読研究会は常時十名程度で行われたが、訳注の作成者は、漢文部分については、代表者の他に、村田みお(中国哲学・日本学術振興会特別研究員(2013年3月時、以下同じ))、趙ウニル(中国哲学・京都大学大学院文学研究科修士課程二年)、王俊鈞(中国哲学・京都大学大学院文学研究科研究生)のあわせて四名が作成し、作品の選定と、作品に関わる記述の作成については、竹浪遠(中国絵画史・黒川古文化研究所研究員)、西林孝浩(中国仏教美術史・立命館大学文学部准教授)の両氏にお願いした。訳注は当初の目的の通り、精密な注釈を加えると同時に、当該跋文が見た「画題」と「画風」を想見できるものを選定し、検討するという作業を行い、その結果をまとめており、大きな成果を上げたものと思われる。

また、ここで特に注記しておくべきは、当初は予想していなかった大きな収穫があったことである。それは、これまで、特に「作家のアトリビュート」の問題で、美術史研究上は無視され、また、所蔵美術館においても展示することが難しかった作品(それは実は割合で考えるとどの美術館でも相当数にのぼると想像される)に関して、確か

に比定されている作家の作品とは到底考えられなく、美術史上は問題を持ったものだったかも知れないが、本研究のように、宋代あるいは元代の画跋や題画詩（対象となった作品のほとんど亡失していると言ってよい）を研究する際、そもそものような図柄だったのかということを考える際には極めて有用な情報を与えてくれるものが少なくないという事実を明らかにしたことである。今後は、そのような作品にも光を当てることにより、大きな意味での美術史研究を発展させる端緒のひとつを見いだせたと見えよう。

なお、本研究では、研究に平行して、『中国絵画全集』（文物出版社）の図版のデータのデータベースを作成した。上記記注の作成に役立てたものだが、今後の研究にも大いに有用なものであることはいうまでもない。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

・ 宇佐美文理 「小学と書」（『中国思想史研究』第34号・85-105・2013）
査読無

・ 宇佐美文理 「「形」と気象」（『哲学研究』593号・33-53・2012）
査読有

・ 宇佐美文理 「模倣の価値」（『中国思想史研究』第31号・33-64・2011）
査読無

・ 宇佐美文理 「術数類小考」（『陰陽五行のサイエンス 思想編』（京都大学人文科学研究所）・100-110・2011）
査読有

・ 宇佐美文理 「六朝時代における「信仰」の素描」（『三教交渉論叢続編』（京都大学人文科学研究所）・1-25・2011）
査読有

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇佐美 文理 (USAMI BUNRI)
京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：70232808

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：